

巻頭言 — 植物についての伝統と学問への敬愛

Respectful affection toward the tradition and academicism on plants

木俣美樹男 (Mikio KIMATA)

イギリス南部の古い町カンタベリーで暮らし、ケント大学とキュー植物園で連携運営されている大学院民族植物学コースの講義や実習に、世界各地から来た院生たちと一緒に参加する機会を得た。また同時に、研究目的である雑穀と農耕の起源に関する人類学・考古学の文献収集、腊葉標本の観察、生物文化多様性保全のためのナショナルトラストなどの現場訪問を行なうことができた。多くの場所と人々を訪問し、そこで多くの植物と図書にめぐり会うことにより、イギリスにおける植物についての伝統と学問への深い敬愛を知り、強い共感を覚えたので、いくつかの見聞を紹介したい。

カンタベリー大聖堂には図書館などが併設されている。この図書館には多くの古文書が収蔵されている。これらの文書は聖堂と同じように、当時の政治によって置き場所をさまようなど数奇な歴史を刻んできた。興味深いのは、修道士たちが植物による施療を学んでいたのであろうか、多くの植物学関連の図書があることである。かの高名な施療者で旅行家であった x. Gerard (15 x x) の植物図鑑原本を見せていただくことができた。グーテンベルグが活版印刷を発明してから約1世紀後の印刷物で、1000ページを越える大著である。この中に、なんとうれしいことに、キビヤアワの図と解説が数ページにわたってあった。閲覧中に、周りの閲覧者たちは古い紙に書かれて、丸められ、紐で括られた手紙を、まさに紐解いて読んでいる。何

をお調べかと聞くわけにはいかなかったが、学究的な雰囲気には深い敬意を覚えた。

王立キュー植物園の図書館、腊葉標本館、種子銀行、何もかもが植物で充たされていた。たとえ一時でも非常勤職員になり、ここで腊葉標本を見て、文献を探すことができたことは、植物学者として至福の時間であった。多くのボランティアが植物園の管理、友の会の運営、講義・実習の補助に参加していることは、とてもすばらしいことである。

ロンドン大学、ケンブリッジ大学の佇まい、自然誌博物館、大英博物館の威容も、それぞれに、大学あるいは研究者たちの高い誇りを感じた。ワトソンとクリックが DNA の 2 重ラセンを議論したパブなど興味深かった。ギネスで酔っ払ったおかげで、このモデルができたのかと感じ入った。

ナショナルトラストで運営している x x 果樹品種保存園、同じくブリーンの保全林に市民がどれほどのことまでできるか、その高い可能性を垣間見た。カンタベリー大聖堂を取り囲む旧市街を一望できるケント大学キャンパスに暮らす、ブラックベリー、イラクサやバタフライブッシュ、ウサギ、キツネ、リス、ウミネコ、ブラックバードやロビンたち、一時暮らしたダーウイン・カレッジ裏のムギ／アマ畑とヒツジ牧場、そして民族植物学を志す人たちと、平穏な学びの時間を共有できてとてもうれしかった。